

■エッセイ

甲南大学総合講座

「神戸っ子のこうべ考」
出版にあたり

辻田 忠弘 〈甲南大学教授・医学博士〉

こうべ考」である。

「神戸っ子」の定義にも色々あると思う。ここでは、神戸を愛し、神戸の第一線で活躍している「神戸」のような人とした。すなわち、「神戸」とは国際的でスマートで、どことなくきどったところがある半面、港町としての泥くささと頑固さと郷愁を漂わせたあたかさのある町である。また海もあり、山もあり、四季のはっきりしたあそび心をわすれない町である。

このような「神戸」のような神戸っ子の先輩、友人、知人二十数名と共に、世間一般の文化論や地域学とは違い理論よりも実際に重点を置いた「こうべぶんか」の研究を神戸のポートピアホテルで始めたのが四年前である。漢字の「神戸文化論」でもバターンくさいカタカナの「コウベブンカロン」でもないひらかなの「こうべぶんかろん」である。

一年間の研究成果を講義にしたのが甲南大学総

「国際的で、ハイセンスで、ちょっと気どったK OBEというまち。それでいて港町としての郷愁をただよわせる神戸。この神戸に熱くかわる各界の人々二十五人が、甲南大学総合講座を舞台に、さまざまな角度から「昨日の神戸」を語り、「明日の神戸」を熱っぽく論じる『こうべ学事始』を謳い文句にこの七月発売の甲南大学総合講座「神戸っ子のこうべ考」(A5変型三〇六ページ)とは何なのか。六月五日の生田神社会館での出版記念パーティを見てほしい。二百三十名の出席者の中には、兵庫県知事・甲南大学理事長と共に約二十名の一流クラブのママさんが有料で出席していただいた。甲南大学理学部講師で「神戸っ子」である二十五名の著者の多くが硬軟ボーイでもあることを物語っている。この「あそびごろ」を大切に神戸を従来の社会学者や文化人類学者とは違った切り口から切ってみたのがこの「神戸っ子の

神戸っ子のこうべ考出版記念パーティー

1991.6.5



出版記念パーティーで紹介される執筆者たち（写真中央が筆者）

合科目「神戸っ子のこうべ考」であり、三年目のまとめとして書籍にして出版したのが今度の「神戸っ子のこうべ考」である。

「神戸っ子のこうべ考」の特徴の一つは、前述の理由から、甲南大学の「神戸っ子」の専任教員五名に対して、二十名の「神戸っ子」の講師陣を外部から迎えたことにある。各講師が神戸と自分とのかかわりについて、今までの経験や研究成果

を九十分にまとめ、一年間に一回だけ講義をするのであるから、面白くないわけがない。今年も千名近い学生がこの講義を受講している。ただ文部省が管轄する大学での正式（通年四単位）の講義であるから、制限もある。「神戸と美術」（彫刻家新谷瑋紀）ではヌード・モデルを教壇に立たせて女性美を論じたいとの要求があったが、教養委員会で「そんな非常識なこと……」と宥められたし、「神戸と酒」（沢の鶴樹社長西村隆治）では実際に酒の味を学生にきかせながら酒の話しをしたいと申し出に対しても、「大学生の半数は二十歳以下の未成年者である。未成年者に教室で酒をのますなんて……」と拒否された。おまけに、「神戸とコーヒー」（上島珈琲社長上島達司）のように教室でコーヒーをのませながらの講義にまで「教室での飲食は禁じられている……」とのおしかりを受けてしまった。「神戸っ子のこうべ考」の主任である私の学内での人気は落ちる一方である。

「神戸っ子のこうべ考」の目的が、神戸の伝統文化の再確認と時代に合った新しい神戸文化の創造、若い人たちへの神戸文化の受け継ぎにある一方、広く一般市民の神戸理解を助け、地域学の研究に少しでも寄与できることを願って、この講義をベースにした「神戸っ子のこうべ考」の出版にふみきったのである。お役に立てば幸いである。

「神戸っ子のこうべ考」

甲南大学で開講されているユニークな総合科目「神戸っ子のこうべ考」をまとめたもので、神戸の文化が様々な角度から紹介されている。

神戸新聞総合出版センター 1800円。

井植文化賞 受賞者 発表表

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故井植歳男氏の遺志によって昭和44年11月に設立された財団法人「井植記念会」。同会では兵庫県在住又は兵庫県にゆかりの深い人の中から、めざましい活躍をされた人を受賞の対象としてその功績を讃えるとともに、地域社会のより一層の発展に寄与したいと考え、この「井植文化賞」を昭和52年より設定しました。今回で第15回を数え、各分野の評論家、学識経験者などで部門ごとに構成される選考委員会によって、6部門と第15回記念特別賞の受賞者が次の通り決定しました。受賞者には副賞として賞金・個人30万円、団体50万円、さらにライオンのブロンズ像が贈られます。

□文化芸術部門 宇江 敏勝

▲作家▼



和歌山県立熊野高校卒業後、紀伊半島の山中で林業労働に従事し、詩と小説の同人誌「VIKING」に作品を発表。山村にしっかりと根をおろしたその発言は重い。経験を生かした講演も数多くこなし、新聞にエッセイも寄せる。主な著書に「山びとの記」(中央公論社)「木の国紀聞」(新宿書房)などがある。昭和十二年生れ

□科学技術部門 廣畑 和志

▲神戸大学医学部附属病院長 医学博士▼



昭和28年3月米子医科大学医学部医学科卒業。40年4月神戸大学医学部助教。52年7月同学部教授。平成元年11月より現職。専門は整形外科学。慢性関節リウマチの基礎的研究に取り組み、世界的な評価を得ている。一方、スポーツ医学の分野でもはば広く活躍しており、神戸市のスポーツ振興にも大きく貢献している。

□社会福祉部門 賀川記念館

▲代表 村山 盛嗣▼



昭和38年、故賀川豊彦の業績を記念して建てられ、地域福祉事業に従事する。現在は賀川思想を受け継いだ館長の村山盛嗣氏を中心に、学童保育、クラブ活動、困りごと無料相談室などを行っている。中でも14年前から始められている一人暮らし老人への給食サービスは、神戸において先駆者の役割を果たした。

第15回

井植記念会主催

□ 地域活動部門

山村留学制度

△代表 大田 健治▽



昭和58年発足。都会の小学校児童を山村の家庭に一年ないし二年あずかり、豊かな自然の中で地元の子供と共に生活し、共に学び、都市と山村の交流を深めつつ、子供たちの豊かな人間形成に役立て、地域ぐるみで過疎の山村の役割を高めようとするもの。

□ 報道出版部門

「ゴミを追う」取材スタッフ

森本 章夫 梶岡 修一（写真は取材班代表）
林 芳樹 竹葉 広治 森本章夫社会部次長
相川 康子 角岡 伸彦



平成2年8月から平成3年7月まで、神戸新聞に連載された「ゴミを追う」は、身近な所からゴミ問題を見つめ直し、ゴミを出す社会構造、生活スタイルを問い直しつつ、問題点を洗い出している。読者からの反響も大きく、県外からも含め「記事のコピーが欲しい」などの問い合わせが相次いだ。

□ 国際交流部門

アルカディア協会

△代表 中村八千代▽



昭和55年12月に神戸女学院大学の卒業生を中心に結成。管弦楽団、合唱団から成る。ドイツ・パツハゾリステンの創立者ヘルムート・ヴィンシャーマン氏、黒岩英臣氏を指揮者に迎え、音楽活動を行なっている。定期演奏会の他毎年イースターコンサートを開催。一昨年、昨年、のシンガポールでの公演は高い評価をうけている。

□ 第15回記念特別賞

文化団体

半どんの会

△代表 小林 武雄▽



本年創設40周年を迎えた文化団体。兵庫県下における会員数は現在千五百余名。その主な活動としては、季刊「半どん」の発行、半どんの会文化賞（現代芸術、文化功労、県民感謝、及川記念奨励の各賞）など。「人間の尊厳」の理念の実践をテーマに、地域における文化振興のため幅広い活動を続けている。

●第15回井植文化賞
文化芸術部門

山村に根を下ろした
執筆活動

宇江敏勝



★選考委員

北川 荘平

<作家>

島 京子

<作家>

河内 厚郎

<関西文学編集長>

宇江敏勝さんは誠実な書き手である。三重県尾鷲市に生まれ和歌山県の高校を卒業後、紀伊半島の山中で林業に従事してきた。そのかたわら「V.I.K.I.N.G」に作品を発表し、すでに「山びとの記」や「木の国紀聞——熊野古道より」など多くの著書がある。新聞等にも骨太なエッセイを書いてきたベテラン作家だ。

森の生活者としての現場の視点に裏付けされているだけあって、環境問題を論じても説得力がある。都会の書齋で観念的な言葉を紡ぎ出すのは異なり、具体的なのである。実際のなのである。だから文章も無駄がなく簡潔だ。そして洗練されている。都会的とすらいってよい近代的な知性を感じさせる。地方からの視点というと、とかく恨みがましい文学になりがちだが宇江さんはそうではない。

いわゆる近代文学は工業文明にともなうモノの増殖にみあう形で自我を拡大させてきた。宇江さんの文学は文明が新しいパラダイムに突入している今、無秩序なモノの増殖を封じ自然や歴史と共生する新しい自我のありようを示唆している。都と鄙、中心と周縁がいたりまじる兵庫県の将来像にもかかわってくる「二十一世紀の文学」となるかもしれない。

△河内厚郎▽

■選考経過

今年の文化芸術部門は「文学」を対象に選考会が行なわれた。「文学」では第二回目以来、詩人の受賞が重なった為、今回は主に小説、エッセイでの候補を挙げてもらった。

候補者としては同人誌「鬼子」の異色作家浅田修氏、同人誌「カントラ」で活躍中の武田裕氏、単行本も出ている「施餓鬼の八月」の竹内和夫氏、「山は北海は南」の駒井妙子氏らが挙げられたが最終的には「少年の火」の木辺弘児氏、「熊野草紙」の木の国紀聞の宇江敏勝氏で票を割った。

木辺氏は芥川賞候補にもなった実力派。自然描写のうまさや文章の確実性が評価されたが、宇江氏の持つ特異性に一步譲った形になった。和歌山の山奥で育ち、現在も山に住むが執筆するのは主に奥さんの住む神戸、という宇江氏。その文章はクールだが私達の目を引きつけ飽きさせない。

- 受賞者メモリアル
1. 河口龍夫<現代美術>
 2. 山田幸平<作家>
 3. 横井和子<ピアニスト>
 4. 荒木高子<陶芸家>
 5. 多田智満子<詩人>
 6. 田原富子<ピアニスト>
 7. 昇外義<画家>
 8. 安水稔和<詩人>
 9. 延原武春<指揮者>
 10. 山沢栄子<写真家>
 11. 神戸麗ライオンズクラブ
 12. 青木はるみ<詩人>
 13. 今竹七郎<グラフィック>
 14. 菅沼潤<演出家>

●第15回井植文化賞
 科学技術部門
 慢性関節リウマチの
 基礎的研究と
 スポーツ振興に貢献

廣畑 和志



★選考委員

尾崎 勲司

＜神戸大学農学部長＞

北條 卓

＜神戸大学工学部長＞

本間 守男

＜神戸大学医学部長＞

飯尾 理郎

＜神戸新聞社編集局文化部長＞

慢性関節リウマチがどうして関節から始まり、全身性の慢性の病気に進行するのか、廣畑教授が研究に取り組んだ頃は全く謎であった。廣畑教授は1958年世界に先駆けて滑膜の微細構造を電子顕微鏡的に明らかにし、次いで滑膜細胞には繊維芽細胞及びマクロファージ様の二種類の細胞のある事を見出したが、その後この発見は国際的な支持を得て今日に至っている。またこのような基礎的研究を深める一方、絶えずリウマチ患者の救済のために活動を続け、1972年には日本リウマチ学会賞を受け、1980年には若くして日本リウマチ学会長に選ばれている。その後専門医師の育成のために講師として東奔西走、過去10年間に委員長をつとめた教育研修会の数は、実に50回以上に及んでいる。その成果は、50万人のリウマチ病に悩む患者に大きな福音をもたらしている。

廣畑教授は日本リウマチ学会幹事、日本リウマチ財団理事、厚生省リウマチ研究事業の外科的治療班長を勤める一方、米国リウマチ学会の名誉会員に推戴されるなど国際的にも活躍している。

さらに廣畑教授は、スポーツ医学の分野でも、神戸ユニバーシアード大会の選手村診療所長、神戸スポーツ医事科学研究会名誉会長、オリックス後援会理事を務めるなど、神戸市のスポーツ振興にも大いに貢献している。

△本間守男▽

■選考経過

今年の科学技術部門は昨年と同様、候補者が少なく、工学部系から神鳥安啓氏、医学部系から廣畑和志氏、農学部系から加藤征史郎氏の計3人の名前があがった。

有機合成の神鳥安啓氏は、生理活性が見つかっているフッ素を含む有機化合物の合成が難しいことに着目し、その合成法の開発に取り組んでいる。

整形外科学の廣畑和志氏は、慢性関節リウマチの基礎的研究に取り組む、国際的に高い評価を受けている。また、その一方でスポーツ医学の権威者でもあり、個人・企業からの信頼も厚い。

家畜繁殖学の加藤征史郎氏は、種々の条件下における家畜精子の生理学的特性を調べ、家畜人工授精技術の発展と普及に貢献した。今回は、社会的貢献が大きく、これまでの実績も多いことが高く評価され、廣畑和志氏に決定した。

●受賞者メモリアル

1. 櫻井春輔<岩盤力学>
2. 杉山武敏<遺伝子学>
3. 土田広信<農芸化学>
4. 嶋田勝次<都市計画・都市社会学>
5. 沢村誠志<障害者の社会復帰>
6. 安藤四一<音響の研究>
7. 辻莊一<家畜種学>
8. 西塚泰美<生理学>
9. 中岡睦雄<パワー・エレクトロニクス>
10. 清水晃<微生物生態学>
11. 岡田安弘<生理学>
12. 賀谷信幸<計測工学>
13. 田中千賀子<薬理学>
14. 安田武司<熱帯有用植物学>

●第15回井植文化賞
社会福祉部門

福祉の原点を見つめて

賀川記念館



★選考委員

津田 元

<神戸新聞社論説副委員長>

野上 文夫

<川崎医療福祉大学助教授>

橋本 明

<家庭看護促進協会
事務局長>

神戸に生まれ、日本のみならず世界にその名を知られた賀川豊彦は昭和35年に72才でこの世を去る。賀川の精神を受け継ぎ、彼の残した数々の業績を記念するために昭和38年に建設されたのが賀川記念館である。

賀川は、セツルメント事業とは「人格交流運動」であるとし、人間の意識変革により社会を改造しようと考えていた。この記念館はそうした賀川の思想を實踐すべく、地域の子どもから老人までを対象とし、人格の触れ合いをめざして生涯教育、地域福祉活動に取りこんで28年になる。なかでも一人住いの老人の給食サービス活動は神戸で初めての試みであったが、月二回のこの活動は今年で14年めになる。他に、学童保育や文化教室などの子どものための事業や住民のための相談事業などを続けている。館長の村山盛嗣さんは4年前に過労から病に倒れたが、その経験をこれからの事業のなかに積極的に生かしたいと七人の職員と共に情熱を燃やしている。

あと何年かすれば新しい記念館の建設も計画されており、21世紀の地域社会のニーズにスタッフがどう取りこんでいくか、これからの活動が期待される。

△橋本 明▽

所在地

神戸市中央区吾妻通り丁目2-10
電話〇七八(二二二)三六二七

■選考経過

井植文化賞も今年で第15回を迎えるということもあり、今回の選考会では長い年月を地道に福祉活動に携ってきたグループが候補にあげられた。

県立西宮病院ボランティアグループは、昭和41年にスタートしたボランティア活動の老舗。医療薬害情報センターは、薬害を行政に訴える活動などを行なって12年目になる。11万語の語彙を持つコンピュータ点訳ボランティア活動の点訳ボランティアグループ連絡会、家族ぐるみで有料老人ホームを続けるホットファミリア西浦、痴呆老人を抱える家族の協力グループかよう会など、身近な問題に取りくむ各候補の活動が高く評価された。

現在神戸で10カ所を数える、一人暮らし老人への給食サービスの先駆けとなった賀川記念館。最終的には地域と共に歩んだその実績に、第15回井植文化賞が送られることとなった。

- 受賞者メモリアル
1. 福来四郎
 2. 小畑延子
 3. 神戸市立友生養護学校
 4. 春本幸子
 5. 富永繁男
 6. 神戸大学看護ボランティア
 7. 米田寛子
 8. 神戸東部地域入浴サービス実施委員会
 9. 涌井安太郎
 10. 山本博繁
 11. エリア会、OHPこうべ
 12. 誕生日ありがとう運動
 13. 兵庫ボランティア協会
 14. 神戸いのちの電話

●第15回井植文化賞
地域活動部門

健やかな人間形成をめざす

山村留学制度



★選考委員

小笠原 暁

〈芦屋大学教授〉

長島 晴雄

〈前・神戸新聞常任監査役〉

住野 和子

〈神戸YMCA
プログラムディレクター〉

この制度は、都会の小学校児童を山村の家庭に一年ないし二年あずかり、豊かな自然の中で地元の子どもと共に生活し学び、都市と山村の交流を深めつつ、健やかな人間形成に役立て、山村の役割を高めようとするもの。

道谷小学校は、昭和五十八年、兵庫県下で初めて地域ぐるみでの制度を発足させ、八年間に神戸、大阪、明石など都市の児童七十七人を受け入れ、成功させており、いままも継続発展させている。

発足当初は、過疎化の激しい播州奥地の小学校として、統廃合の危機を打開するための方策として実施に踏み切ったが、いまや都市と山村交流のモデルケースとして注目され、県下他地域にも広がろうとしている。都市の子供たちは、大自然に触れる貴重な経験が心身の豊かな成長にプラスし、山村の子らも都会の子らとの触れ合いから、閉鎖的になりがちな知性感性を開く体験を得ている。

この運動は地域の協力なしには成功せず、道谷小学校の場合も、地元の地域ぐるみの協力があればこそであることを指摘したい。

兵庫県は過疎過密の両地域を抱えているだけに、今後いっそう注目し、応援したい制度である。

▽長島晴雄▽

■選考経過

今年 of 地域活動部門には、半どのの会、神戸都市問題研究所、青垣町もみじマラソン、丹羽古陶館、山村留学制度と様々な候補が挙げられた。

受賞の条件として、5年以上の活動実績があり、今後の活躍が楽しみな団体ということになり、過去に県の文化賞の受賞歴のある、半どのの会は特別賞に決まった。

その後の協議の結果、実施されて8年目になる山村留学制度に決定。この制度は、兵庫県安栗郡波賀町立道谷小学校で実施されていて、都会の小学生児童を山村の家庭に一年ないし二年あずかり、都市と山村の交流を深めつつ、子供たちの豊かな人間形成に役立てようとするもので、いまや都市と山村交流のモデルケースとして、県下神崎郡などにも広がろうとしており、過疎、過密両地域を抱える兵庫県としては、今後も推進したいテーマだと言える。

- 受賞メモリアル
1. 城崎郡日高町
 2. 明石市民のコミュニティ活動
 3. 一宮町文化協会
 4. 尼崎郷土史研究会
 5. 尻池南部地区自治連合協議会
 6. 月刊神戸っ子
 7. 明延ふるさとづくりの会
 8. KICS
 9. 丸山地区住民自治協議会
 10. アンドレ・ブリューネ
 11. 神戸新聞文化センター
 12. 尼崎市演劇連絡協議会
 13. プナを植える会
 14. 松島興治郎

●第15回井植文化賞

報道出版部門

神戸新聞連載企画

「ゴミを追う」

神戸新聞社・社会部

ゴミ取材班



右上より 森本章夫・林 芳樹・相川康子
右下より 梶岡修一・竹葉広治・角岡伸彦

★選考委員

松田 禮二

<朝ラジオ関西取締役社長>

西 昭道

<NHK神戸放送局長>

三木 康弘

<神戸新聞社論説委員長>

ゴミ問題が、地球規模での環境問題と重なって大きなテーマとなっている。単に、あふれるゴミをどう処理するかという技術的な問題ではなく、資源ゴミをどうリサイクルし、大量生産、大量消費、大量廃棄の社会構造、生活スタイルをどう見直すのが問われている。

連載企画「ゴミを追う」は、この視点に立ち、身近な所からゴミを巡る問題点を洗い出しつつ、読者とともにゴミを通して生活を問う直そうと意図したものである。

昨年八月にスタートした連載は、その企画意図を十分に展開し、よくキャンペーンとしての実を上げた。地域の新聞としての使命と機能を遺憾なく発揮した報道活動といえるのではない。

反響は大きく、県下はもとより県外からも記事コピーの要請、問い合わせが相次いだ。各自自治体もゴミ減量化や再資源化への方策を模索していただに、連載は今後の道筋を示す貴重な手がかりとして注目され、連載と同時進行の形でさまざまな行政施策が打ち出されもした。また、産業界にとっても、ゴミは避けて通れないテーマであり、執筆陣が講師として招かれるケースが少なくなかったことを付記しておきたい。

△三木康弘▽

■選考経過

今回の選考会では、「椎名麟三管見」(田麻新著・神文書院)「神は野を駆けて」(姫路独協大学播磨学研究会編・神戸新聞総合出版センター刊)「神戸新聞連載企画・ゴミを追う」(神戸新聞社社会部)「ラジオシンポジウム・いま教育を考える」(ラジオ関西制作部)が候補作品として挙がったが、その番組を中心とした教育問題に対する活動で、日本民間放送連盟賞(近畿地区)の放送活動番組部門で最優秀賞を獲得した「いま教育を考える」と広範囲に渡る取材で生活スタイルとしてのゴミ問題を考えた「ゴミを追う」が最後まで受賞を争った。

最終的に、ゴミ問題は環境問題の重要なフアクターであり、地球規模で、いま最も注目に値する課題であるという点で、「ゴミを追う」が僅差で受賞した。

昨年同様、放送分野と活字分野を同次元で選考するのは極めて難しいとする意見が出され、今後、検討の余地があると思われる。

- 受賞者メモリアル
1. 「あなたの愛の手を」
 2. 神戸空襲を記録する会
 3. 落合重信
 4. 春木一夫
 5. 「兵庫探検」「兵庫史を歩く」
 6. 「神戸の中堅150社」
 7. 神戸新聞淡路路総局「淡路祭事記」
 8. 「神戸からこんにちは」「天津からこんにちは」
 9. 神栄起郷
 10. 「私たちの昭和史」
 11. 「バルモアの病院日記」
 12. 「オ」収録港湾労働経済人」
 13. 「ひょうごの海」
 14. 「メダルは笑顔に輝いた」

●第15回井植文化賞
国際交流部門

アルカディア 協会

神戸を拠点に世界に翔く



★選考委員

新野 幸次郎

〈神戸大学名誉教授〉

武衛 晴雄

〈神地崎工業顧問〉

宇都宮 浩

〈兵庫県国際交流協会理事〉

地方の国際化の進展とともに、諸外国との交流のあり方も、単に晴着の交流ではなく、もっと実質的な普段着の交流を図らなければならぬ、とりわけ文化の交流が大切であるとの考え方がようやく浸透してきた。ところが、そのような国際文化交流を目指し、すでに十一年も前に神戸を拠点として若い音楽家が集まり「アルカディア協会」を結成。現在約40名で活動している。以来国内でのコンサートはもちろん、ドイツ、イタリア、オーストリア、シンガポール等の海外で活発な音楽活動を展開してきた。例えば、一昨年と昨年の二度に至るシンガポール公演では、同協会の「室内管弦楽団」と「室内合唱団」のメンバーが、パツハやモーツァルトの曲やシンガポールのナシヨナルソングの演奏を行い、万場の拍手喝采を受けた。また、昨年に引き続き今年も、世界的なオーボエ奏者で指揮者でもある「ヘルムート・ヴィンシャーマン」氏を迎え、甲南女子中学、高等学校のコーラス部百名も出演してコンサートを開催する。

このように彼らは、地域の文化進行と国際文化交流の結び付きの重要性を明確に意識し、またそれを、苦しい台所事情に拘らず見事に実践している。彼らの理想と勇氣に拍手を送ろう(宇都宮 浩)

■選考経過

本年で5回目を迎えた「国際交流部門」には、女子留学生に対する奨学金制度を設け、女子留学生の日本語スピーチコンテストを毎年行なっている神戸ソニタクラブ、アジア、南太平洋からの研修生受け入れと帰国研修生のフォローアップを勤める財団法人PHD協会、フェスピック神戸大会にブータン選手団を招聘した神戸ブータン友好協会が候補に挙がった。

また、昨年に引き続き、移情閣を拠点として日中間並びに国際間の文化交流を増進している移情閣友の会、シンガポール、ヨーロッパなど海外演奏旅行をし画期的な成功をおさめたアルカディア協会、高校交換留学生プロジェクト、日本語補助教員派遣プロジェクトなどを行なう神戸日豪協会も高く評価されているが、今年、アルカディア室内管弦楽団、アルカディア室内合唱団が国内外でさまざまな活躍しているアルカディア協会に決定した。

●受賞者メモリアル

- 1、加藤 一郎(神戸日独協会名誉会長)
- 2、神戸日本チリ協会
- 3、神戸YMCA
- 4、CHIC

●第15回井植文化賞
第15回記念特別賞

文化団体

半どんの会

福祉と文化の向上を
めざして40年



★選考委員

小笠原 暁

〈芦屋大学教授〉

長島 晴雄

〈前・神戸新聞常任監査役〉

住野 和子

〈神戸YMCA
プログラムディレクター〉

昭和21年春、朝倉斯道、阪本勝、桐山宗吉、及川英雄らが集まって、荒廃した焼土の都市で、「阪神ペンクラブ」を結成して活発な文学活動を展開したが、同じ時期には若い詩人、洋画家たちも詩人集団「火の鳥」を中心にさまざまな芸術活動を展開、昭和27年秋、映画、音楽を共通の話題とした文化グループの場、文化団体半どんの会が結成された。

その後、県下在住の有識者、芸術家、教授、官財界、マスコミ人が相寄って、まず67名から発足、親睦と郷土文化の育成を目的とし、随想誌「半どん」を発行、いちはやく半どんの会文化賞を設定して同賞の嚆矢となったが、例会、映画観賞会、各種文化座談会の企画と開催などを事業として、ひろく全県にわたって文化活動を展開。

やがて、その活動も多様に範囲を拡充、会員相互の社会的発言力も漸次昂まり、まず兵庫県、神戸市の福祉行政の充実と専門化を力説、同行政の近代化に職員と協同して実践につとめ、また会員作品をチャリティして県、市福祉協議会、福祉施設等に再三献金するなどボランティア活動を行い、県・市民劇場、音楽団体の育成、県立近代美術館の建設など、神戸の文化地盤の沈下、文化不毛論に対し

て市・県民による芸術文化参画による地域文化肥沃論を各会員ごとにその地域の実情に即してためまじ献言、その実現に努力。文化人自身の責任で会を育てるという同意的結束をモットーに40年間を、試行錯誤をくりかえし乍ら今日に到っている。

現在会員千五百余名、会友、支部会員、姫路、明石、三木、稲美、西脇、丹波の六地方を合して千二百余名。二千七百余名の賛同者を得ているが、また会員の同地方の地域文化の向上に多大の貢献を計って、他の文化育成などの中心的役割を果たしている。会は毎年、半どんの会文化賞を制定して、現代芸術賞、文化功労賞、県民感謝賞、及川記念奨励賞と身体障害者への芸術奨励賞を設定し、隠れた人材の発掘、顕彰、新人の育成につとめると共に、会員相互の啓発と友愛の実をあげ地域住民のコミュニケーションを計る。会員は互いの立場を尊重しあい、平等に季刊「半どん」で互いの作品、意見を発表、芸術文化の向上と地域福祉の発展につとめて、そのみえざる功績は大きいといえるだろう。

神戸文学賞作品募集

本誌は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞・神戸女流文学賞を創設いたしました。これまで左記の通りに各賞の受賞作が決定しておりますが、第11回の募集より、さらに質の向上をはかるため「神戸文学賞」の名称に統一、受賞作を一作品として、現在、広く作品を募集いたしております。

- 。第十一回神戸文学賞「瞑父記」(田能千世子―茨木市)
- (この回より神戸文学賞と同女流文学賞を一本化)
- 。第十二回神戸文学賞「夢食い魚のブルーグッドバイ」(釜谷かおる―高砂市)
- 。第十三回神戸文学賞「お夏」(門田露―西宮市)
- 。第十四回神戸文学賞「風車の音はいらない」(上田三洋子―長岡京市)
- 。第十五回神戸文学賞「渴き」(刀禰喜美子―大阪市)

ここに第16回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

〈募集要項〉

- 一、応募作品は小説とし、応募資格は問いません。ただし応募作品数は一篇に限ります。
 - 一、応募作品は未発表原稿、または締切り前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。
 - 一、原稿枚数は四百字詰60〜70枚。
 - 一、原稿には住所、本名(筆名)、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品梗概をつけて下さい。
 - 一、締切りは八月三十一日(当日消印有効)
- 一、受賞作品発表は本誌一九九二年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。
 - 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
 - 一、受賞作品の著作権は本誌に属します。
 - 一、受賞作品には副賞として賞金三拾万円が贈られます。
 - 一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一―三の一 大神ビル九階 月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。
 - 電話〇七八―三三一―二二四六

△選考委員▽杜山 悠・武田 芳一・鄭 承博 主催／月刊神戸っ子

■NHK大河ドラマ太平記に寄せて

いま、なぜ「太平記」!

歴史ロマン

楠木正成

神戸の人々が「楠公さん」と呼び親しんでいる、湊川神社に祀られる楠木正成。テレビ放映のいま、注目の正成の魅力を探ってみた。

●座談会出席者

吉田 智朗さん（湊川神社宮司）

高橋 康夫さん（NHKエンタープライズ）

熱田 公さん（神戸大学教授）

鈴鹿千代乃さん（神戸女子大学助教授）

吉田 ちょうど昨日御例祭が行われたところなのです。湊川の戦は5月25日で、その日が楠公祭。そして昔は旧暦なので明治7年の旧暦5月25日に御例祭が行われ、それが新暦の7月12日だったのです。昨日は楠木正成の後裔もたくさん参列されました。これらの人々は約170人で、いま楠木同族会と云うのをつくっております。

高橋 良い日にお話しができて嬉しいですね。今放映中のNHK大河ドラマ「太平記」は、吉川英治さんの「私本太平記」をもとに脚色しているのです。

吉田 新聞での連載は昭和33年からで36年に湊川の戦いを書かれました。その前に吉川先生から取材に行くとお



武田鉄矢扮する楠木正成

手紙をいただいたのです。新聞を毎日読んでみると、足利尊氏がそこまで攻めて来ているのに、吉川先生はまだお見えにならない。ハラハラしていると、奥さんとお嬢さん、それに挿絵画家の杉本健吉さんを連れて来られました。そこで先生に「尊氏の方が先に来たらどうしようかと、心配していました」と申したので一同大笑いとなりました（笑）。先生の取材日記筆間茶話には「この地に於ける大楠公の最期を明日から書こう、とするのに差迫られての訪問は、さながら泥縄式だとも言えようが、それでもなお、私には百巻の書を読むにも勝る」と書かれてあります。あとに丁寧なお手紙をいただき「帰ってから病気で寝たので礼状が遅くなった」と書かれてありました。

高橋 最後のお仕事になりましたね。しかし吉川先生が書いて下さらなかつたら、とても我々もドラマには出来なかつた。全国をコツコツと取材され、昭和36年当時に書かれた事は大変だったでしょうね。我々にとっては、有り難い事です。



吉田 智朗さん

鈴鹿 確かに古典の太平記は読み辛く、吉川文庫で分
り易く読めるようになりましたね。

高橋 私が大河ドラマの担当になり、先輩達に話しを聞
くと、太平記はドラマにするのが難しく出来なかったと
言う人が多いのです。そして計画を立てたのですが、か
なり抵抗がありましたね。神代の時代ではないけれど、
完結した一時代として箱に入れて仕舞っている感覚。そ
れと天皇制の問題や、人物の評価の仕方が、戦前と戦後
で大きく変わった事で、今まで皆、手を着ける事が出来
なかったのです。でも、平成の時代になり状況も変わ
っていますし、正成公を筆頭に登場人物は皆魅力的で素
敵な人物像ですから。政治的、社会的な状況はあります



高橋 康夫さん



熱田 公さん

が放って置く方はないと、回りを説得したのです。
発表してから、吉田宮司さんが南朝関係の神社の方を
連れて来られ、スタッフとお目に掛りました。それは
「太平記をするに当って、疎かにしてはいかん」と、圧
力団体の如きご訪問で（笑）。錚々たるメンバーが集ま
り、リーダーが吉田宮司さんでした。

吉田 南朝関係神社15社の中で、私が最年長なので会長
にされました。ご祭神を不敬な言葉で呼ぶようなことが
あっては困る。教科書の言葉で呼んで下さいと言ったの
です。

高橋 吉川先生もご自分の研究成果を書かれた物ですが、
宮司さん達ともご意見の違う所もありでしょうが、



鈴鹿 千代乃さん



昭和36年、取材の為湊川神社を訪れた吉川英治さん（手列中央）両脇は奥さんとお嬢さん。右端が吉田宮司さん。

我々は、南朝も北朝もなく登場人物を各々生き生きと描きたいのですと、説明しました。ここで宮司さん達に嫌われたら大変だと僕は必死でした（笑）。登場人物を躍動的に描く事、そして時代時代の評価はありますが、正成公は大スターでしょ。正成公をどう描くかが私達の大きな課題でありましたし、ガチガチの人間像では魅力が無い事をお話したのです。宮司さんが「よし分かった」とおっしゃって下さったのでホッとしました（笑）。このドラマをするに当って、一番初めに心を引き締め、ある意味で慎重にしなければと思われたのが、吉田宮司さん達のご訪問でしたね（笑）。その時、自由に話しが出来たこととお互い理解ができて、以来定期的に神社とやりとりして大変効果があったと思います。

吉田 私も嬉しかったですよ。

高橋 今日まで無事お付き合い出来る事も（笑）。

吉田 後醍醐天皇が摂関政治を廃し、天皇直属にし「朕が真儀は未来の先例たるべし」と言われる。それは大変進歩的だと思うのです。武家政治が倒され天皇親政に成

ると言いますが、実際は公家政治も倒されたのですね。それは明治維新で武家政治が廃されたばかりか摂関政治も亦廃されたのと同じですね。明治維新は成功しましたが、建武新政では尊氏が勝ったのでまた武家政治にかえりました。後醍醐天皇は素晴らしい先駆者です。元来、東国はまだ米経済・土地経済ですが、正成公の方は商品経済・流通経済で、京都は勿論、堺の港を通して、内海・九州・半島・大陸にまで眼は向いています。これは天皇の考えと一致します。結局、幕府が復活し、天皇・正成公が負けたので、市民革命が、明治維新まで、四百年も遅れたことになりました。

高橋 天皇と正成公の関係は非常に麗しく、人間関係として魅力的ですね。

熱田 足利尊氏や新田義貞は、関東の古い体質の大武士団。近畿は畿内型と言って、社会経済の在り方が遙かに進んでいて、関東型とはタイプが違うのです。宮司さんのおっしゃる商品・流通経済とは、単に土地を持ち米を握る事ではありません。武士といえば、誰しも土地と思うのですが、この時代の畿内の武士は商業などにも随分関わっています。それに畿内やその周辺は農民が強く、村の在り方が関東とは全然違っています。南北朝の頃から出来始めた村の鎮守の信仰組織である宮座は、東は美濃、西は備中位まで。宮座は農民の強さのパロメータですね。

鈴鹿 それは農村の力が強くなり、お祭りなどが村の運営で行なわれる様になった事に表われるのでしょうか。

熱田 そうです。村民一人一人が強くなって、村の鎮守の信仰が高まる訳です。そしてこの宮座による鎮守の祭礼が、鈴鹿先生のご専門の芸能の発達を支える事になるのですね。

鈴鹿 ドラマで、楽市楽座の話しを正成公が尊氏に「京都を復興させたいなら、色々な商人を呼んで市で商売をさせたら良い」と言うのは、それなのでしょうが。

熱田 あの言葉は、時代を少し先走りし過ぎですが（笑）。しかし、流通や金融業をしている武士が居た事は確かです。少し時代が下りますが、池田市の池田氏は応仁の乱で、大した土地を持っていないのに千五百人もの足輕を



日本芸能の原点
くぐつ舞い (宮沢りえ)



連れています。金融にも手を出し、金を持っていてのです。池田市の初めは南北朝時代で、そんな新しいタイプの武士が畿内では、続々と出て来ているのです。畿内だけの歴史なら、室町、江戸幕府の時代を通る事もなく、もっと早く市民改革へと行けたのではないのでしょうか。

高橋 かなり熟していたのですね。

熱田 関東の武士の強い力に結局崩されてしまったのですが。しかし、尊氏の構想はそのままでは時代に合わないのですね。幕府内部はなかなかまとまりません。一方、後醍醐天皇は、延喜天曆の治を再興しようとしたから反動などと、単純に考えている訳ではありません。建武中興と言うと、再興を意味しますが、今は建武新政と言いつ、学界ではこの時代の政治をもっと深く考えようとしています。

吉田 私は学者じゃないけど、40年も楠公の宮司でいると楠公の本は皆読むんですね(笑)。武士の血筋では足利尊氏、公家の統領は北畠親房ですが、上の人は大衆には人気がない。正成公は民間大衆から非常な人気がありますね。この点から言うと太閤さんや、国定忠治と同じじゃないでしょうか。ただ、正成公は彼らより遙かに学問も高く修養も深い。哲学を持っている。非理法権天と言うその天の意味からもうかがわれますね。しかもこの人氣は大衆の味方だったのではないのでしょうか。本太平記

にも書かれ、またテレビでも放映されたが、この戦乱のため、都は勿論どこでも、乞食と病人と盗賊にあふれています。この苦難から大衆を救うため、早く平和の世としようと思っただけです。梅松論での天皇と尊氏との君臣和陸の上奏がよく分かります。大衆を愛していたからこそ慕われていたのです。太平記の中で正成公が出て来るのは、わずかに数カ所です。しかし非常に筆が冴え、正成公を讃える為め書かれたかと思われる位生き生きしている。一般的に昔から、太平記と言えば正成公と思いますね。

熱田 楠公論を言う場合の大切なポイントだと思いますね。その考えを加えると正成公をとらえ易いですね。

吉田 正成公は「君臣和陸のために自分が使者となつて尊氏を説きに行く」と言いますね。太平記の作者は、50年にも亘る戦乱期を書き乍ら、なぜ「太平記」と名付けたのでしょうか。たぶん正成公に最高の評価を捧げた作者は、正成公の悲願である太平の世を期待したからだ、と思わずにはおれません。

熱田 太平記の作者の態度と正成公が合致して、書かれた当時から人気があったのじゃないでしょうか。

鈴鹿 庶民を愛し、愛され祀られる事は庶民信仰ですね。

高橋 テレビでも、正成公が出て来るとこれぞ太平記という雰囲気になり、視聴率が良いのです。太平記の思想の根幹、書き手の言いたい事の多くの部分を正成公が持っているのではと感じますね。ギスギスした権力の争奪戦の側面があるのですが、正成公が出る事によりドラマがふんわりした柔らかさに包まれホッとしますね。

宮司さんが平和とおっしゃったけど、それかもしれない。

鈴鹿 正成公に武田鉄矢さんは、何故だったのですか。

高橋 キャステイニングは大切な所で、もし高倉健さんの場合ならとよく話すのです。高倉健さんは立派ですが、ある意味で型や姿が良過ぎて、少し気取り過ぎる。それも正成公の一面でしょうが、先程の領民や家族を愛し飾らない人物像と言うと、武田鉄矢さんの雰囲気なのです。高倉さんだと戦に行く時、背中に桜の花を散らし「行って参ります」と型にはまってしまい、やや自分のカッコ良さの方に行ってしまう怖れがあるのですね。どちらが良いか難しいですが、親しみ易さを取ったのです。

吉田 一番初め、私達が圧力団体のごとく訪れた時に、武田鉄矢さんがされると聞いて「立派に、親しみ易くしていただければ結構です」と言いましたよ(笑)。

鈴鹿 私は15年程くぐつの事を調べてまして。正成公が関所を通る時に尊氏の前でアドリブで踊りましたでしょ。ああこれだと感激しました。あれが、くぐつ本手振なんです。現代の筑紫舞の中にもあるのですが、全部アドリブなんですよ。

高橋 連歌の様に即興で継いで行く。

鈴鹿 そうです。宰領が踊るのに合わせて風鈴がとんぼ返りしたり、飛んでみたりおどけた振りをするので。

高橋 あの場面は、正成公の妹役の樋口可奈子さんが、泉南の武士の血なま臭い戦いが嫌で、芸能の世界に入ったという設定です。花夜叉は、民衆の気持ちや、芸能娯楽や、虐げられたくぐつまでが、あの戦乱の中で生き抜いて来たという、芸能人の原形を描こうとしています。そして、正成公は庶民の心がよく分るというシーンです。

鈴鹿 資料がなかなか無いのですが。

高橋 そうですね。特に芸能については分らない事が多くて、当時の物を見た人も聞いた人も無いし(笑)。踊りの部分は、狂言の野村耕介さんに教えていただいて再現しています。花夜叉の芸能一座の中に色んな物を織り込みたかったのです。様々な人生を背負った人達ですから。鈴鹿 ワクワクしてますよ(笑)。縁で継っている、仲間というのには素晴らしいですね。そして遊女でしょうか、白拍子でしょうか、尊氏の御子を一夜の契で身籠るのは。熱田 歴史の方の通説とはちよつと違うのですけれど。高橋 ドラマでは宮沢りえちゃんがしているのですが。鈴鹿 でも、父親が居なくても母親が必死で育てる所や仲間が助けてあげる所は、いいですね。

高橋 新しい共同体と考えられますね。

鈴鹿 くぐつの舞いは民族芸能の原流と言えます。南北朝の後、足利幕府で能楽を大成してゆきますね。日本の今ある文化・芸能・茶華道の一番の原流はやはりこの時代です。それ以前のものには辿れないのですもの。

高橋 花夜叉一座の舞いを再現するのは大変苦労しました。ご覧になって雰囲気分っていたらと有難いですね。鈴鹿先生のご研究のご苦労もよく分かります。当

時のテープやビデオなんて無いのですもの(笑)。

鈴鹿 將軍達の前で堂々と芸をして、酒席に侍る位いブライドを持って生きていた人々だから、後々には賤民とされるけれど、あの時代は生き生きとしていたのではないかと。その辺がドラマによく出て嬉しうしいをしました。

高橋 芸能とは、本来そうなのですよね。後々洗練されて行く中で、健康的で豊かな生命のエネルギーの発露の様な物が失われてしまいましたね。

鈴鹿 近世になると歌舞伎舞踊とかジャンルが固まってしましますが、まだそんな物に成っていない芸能の原点ですよ。そしてドラマの中の裏の主役ですね。

高橋 苦勞が報われます。あそこが上手く描けないと、武家と公家だけの戦いとなってしまいますから。それ以外の所に南北朝の新しいエネルギーの発生があったのだと、大事にしている部分なんです。最近の研究の中でも着目されているのではないのでしょうか。

熱田 もちろんそうです。ところで、NHK大河ドラマの第一作「花の生涯」以来、戦前の教育で植え付けられた歴史像を、客観的に見直す方向が出された気がしますね。高橋 我々も、大河ドラマの中で歴史をどう考えるか、良質な娯楽として提供できるかを課題にし、一定の成果を上げて来たのではないかと思うのですが。

熱田 お茶の間サイドでイメージを変えて行く上で、大きな意義があったと思います。

高橋 お茶の間サイドというのは、非常な武器でありパネなのです。歴史書に出て来ない妻や子がどう考え、何をしたかを表わす事で、身近に感じてもらえる点です。

熱田 戦前の人物像にはそれぞれレットテルがあります。清盛は横柄な人物、光秀は逆臣とか。大河ドラマはそれを貼り変えてくれましたね。最後まで残っていたのが、正成公と尊氏。太平記の内容は、歴史上非常によく知られていて、江戸時代には「太平記読み」がありましたね。

高橋 講談やラジオドラマみたいですね。

熱田 講談の原点です。仮名手本忠臣蔵は太平記を借りていて、良く知られていた事を示しています。ところが戦後45年が、太平記は一番読まれなかった。それは、そ



「天下太平であれ」と湊川神社本殿の前で……。

の前の時代に片寄った読まれ方をしたからでしょう。
吉田 正成公は水戸光圀以前から認められていたこと勿論です。歴史的事実も大切ですが、人を動かすのは精神的真実です。正成公ほど偉大な感化を歴史に残した人はいないでしょう。もし正成公なかりせば、以後の日本の精神骨格は違うものとなった筈。明治維新も、今度の戦後処理も、ああした形では行われなかったに相違ない。
高橋 一貫して、正成公は魅力ある大人物だという評価は変わらないのですよね。今回尊氏のドラマが出来る事で、逆に正成公の持ち味が再発見され、ようやく自由な堅苦しくない評価が出て来たなと思います。
熱田 戦後は、本当にタブー視されていきましたものね。

高橋 でも今、より客観的にゆとりのある考え方で、正成公の本来的な魅力と力がよく分かって来ました。日本人全体が、時代の変革期に正成公に縋っているのですよ。
吉田 そうですよ。

高橋 日本人がこんなに好きな人は他にないですね。シナリオライターの池端俊策さんが、正成公の所へ来ると筆が躍動すると言っていました。書いていて面白いのです。最初は、主役は尊氏だから正成公の部分は押さえようと思っていたかもしれないけれど、書いてみたらどんどん書けてしまったのですね(笑)。

吉田 私は、本太平記よりも放映の太平記の方が面白いのじゃないかと思うんですよ。

高橋 それは、もっと大きな声で言っ下さい(笑)。

吉田 神社界トップの五、六人の会で「正成公がなかなか笠置の山のお召しに出陣しないのは現代的だ。しかし女房子供だけでなく、一つの大プロジェクトを持ち、大工・石工・土工・運送業や百姓の命を預っているのだから、苦悩されたのではないか」と意見が一致したのです。私も感動しましたね。

高橋 人間大きな事を起こす時は迷う、特に回りの人の事を考えるとそうですよね。

熱田 南北朝時代のドラマをやっとしてもらえました。大切な時代ですからね。

鈴鹿 日本の文化の原流のある時代ですものね。

高橋 学問も研究が進んで来て、今太平記をする事が意義あると言っていただけ。時代に合った事が幸運です。研究されている方の反響も多く本当に嬉しいです。
熱田 多くの人々の話題に上り、お茶の間で話される事が、学問をも支えてくれる事になります。

吉田 今は、正成公が出て来ない教科書も沢山あります。それを表に出した事。そして今の時代は、世界をあげて価値感が動揺し、権威が崩壊し、個性の発揮が高く言われています。それが21世紀に向けて新しい文化を創造せんとしています。あの時代と全く同じなんです。それでいま太平記が出て来たのです。これが今年だけの一過性でないように、と願わずにはおれません。

(91年7月13日湊川神社にて)